

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 13 日現在

機関番号： 14101
 研究種目： 研究活動スタート支援
 研究期間： 2011 ～ 2012
 課題番号： 23820022
 研究課題名（和文） 項削除現象の獲得に関する理論的・実証的研究
 研究課題名（英文） Empirical and theoretical studies of the acquisition of Argument Ellipsis.

研究代表者
 大滝 宏一（OTAKI KOICHI）
 三重大学・共通教育センター・特任講師（教育担当）
 研究者番号： 50616042

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、日本語や韓国語のような言語に観察される「項削除」現象の獲得を理論・実証の両面から明らかにすることである。理論的には、「格の形態的特徴が融合的ではない言語においてのみ項削除が許される」という新しい一般化を提案し、なぜこのような一般化が成り立つのかを説明した。また、日本語を母語とする子どもが項削除の知識を早くから有していることを実験を通して明らかにした。子どもが実際に項削除に関して受け取ることのできる証拠は限られていることを考えると、この結果は、格助詞の獲得が項削除獲得の引き金になると提案する本研究の理論を支持するものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to investigate the acquisition of Argument Ellipsis, which has been observed in languages like Japanese and Korean. This study proposes the generalization that only languages that exhibit non-fusional case morphology allow Argument Ellipsis, and explains why such a generalization holds cross-linguistically. Also, this study demonstrates that Japanese-speaking children have knowledge of Argument Ellipsis. Given that direct evidence for the acquisition of Argument Ellipsis is limited, the results of the experiment lend further support to the theory of Argument Ellipsis proposed in this study, which claims that the acquisition of case markers triggers the acquisition of Argument Ellipsis.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：項削除・パラメータ・生成文法・言語獲得

1. 研究開始当初の背景

生成文法の提案する、普遍文法に対する「原理とパラメータのアプローチ」に基づい

て、「項削除」の通言語的な分布に関してこれまで主に二つの提案がなされてきた。一つは、「項削除は自由語順を許す言語において

のみ許される」と主張する「自由語順分析」(Oku 1998)であり、もう一つは、「項削除は一致現象が現れない言語においてのみ許される」と主張する、「反一致分析」(Saito 2007)である。しかし、これらの分析は、項削除の通言語的分布を正確に捉えていないということが報告されている。例えば、「自由語順分析」の問題として、セルボ・クロアチア語は日本語と同様自由語順を許すが、項削除は許されず、さらに、中国は自由語順を許さないにもかかわらず、項削除は許されると報告されている。また、「反一致分析」の問題点として、スウェーデン語やアフリカンス語は日本語と同様、一致現象が現れないにも関わらず、項削除は許されない。従って、先行研究にとって問題となるこれらの言語を正しく説明し、更に、これまで観察されていなかった言語に対しても正しい予測をする新しい項削除に関する理論が必要とされている。

2. 研究の目的

以上の研究背景を鑑みて、本研究は、Neeleman and Szendrői (2007) の空代名詞の通言語的分布に関する理論を参考に、格の形態的特徴に基づいたパラメータを提案し、その提案の妥当性を理論・実証の両面から検討する。具体的には、「格の形態的特徴が融合的な言語では項削除は許されない」という仮説の妥当性を理論・実証の両面から検討することによって、項削除に関わるパラメータの性質と獲得のメカニズムを明らかにする。例えば、英語やドイツ語では、格は数や人称など他の要素と融合して現れるため（例えば、英語で *I* (一人称・主格)・*you* (二人称・主格)、ドイツ語で *der* (単数・男性・主格)、*die* (単数・女性・主格) など) 上記の仮説では項削除は許されることが予測される。一方、日本語などの言語では、格は格独自の形態を持っているので（日本語で「が」(主格)、「を」(対格) など)、格は融合的ではなく、項削除が許されることが予測される。この提案はこれまで確かめられていない言語についても新しい予測をする。例えば、ヒンディー語の述語には主語と目的語両方の一致が現れる。また、日本語と同じように膠着言語であるため、格は非融合的な形態的特徴を持つ。「反一致分析」では、ヒンディー語では一致が現れるため、項削除が許されないということが予測されるが、本研究の提案では、ヒンディー語は非融合的な格の形態的特徴を持っているため、項削除が許されることが予測される。本研究の目的の一つは、ヒンディー語のように一致現象と非融合的な格の両方の特徴を持つ言語において項削除が許されるかを確かめることによって、本研究の提案の妥当性を確かめることである。

また、先行研究において、日本語の格助詞は非常に早く獲得されるという報告がなされている (Otsu 1994, Matsuoka 1998, Sugisaki 2011)。もし格の形態的特徴と項削除が本当に一つのパラメータによって支配されているとすると、日本語を習得する子どもは、項削除の知識を、直接的な経験が乏しいにもかかわらず、かなり早い段階から有していることが予測される。この予測を確かめるために、実際に幼稚園児（5歳から6歳）を対象に実験を行うことによって、本当に子どもが項削除の知識を早くから有しているのかを明らかにすることによって、実証的な観点からも上記の仮説の科学的妥当性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 項削除の通言語的分布の調査

主に一致現象と非融合的な格の両方の特徴を持つ言語に焦点を当て、それらの言語で項削除が許されるのかを、先行文献や文法書、母語話者による文法性判断をもとに確かめる。

(2) 項削除の獲得

日本語を母語として話す子ども20人（平均年齢5歳11ヶ月）を対象に、項削除の一つの指標である「緩やかな同一性」解釈に関する知識を子供たちが有しているかを調べる。具体的には、真偽値判断課題を用いて、(i)の状況の下で(ii)と(iii)の文が提示された場合、子供はそれらの文を容認するのかわからないかを確かめることによって、項削除に関する知識を有しているかを調べる。(刺激文では、「緩やかな同一性」解釈と、「不定代名詞」解釈を区別するため、通常の名詞句ではなく、分裂文における前提文を項として削除している。)

(i) アンパンマンのボールは1番の箱、バイキンマンのボールは2番の箱、ドキンちゃんのボールは3番の箱に入っています。アンパンマンは、アンパンマンのボールは1番の箱に入っていると言いました。ドキンちゃんは、アンパンマンのボールは1番の箱に、バイキンマンのボールは2番の箱に、そして、ドキンちゃんのボールは3番の箱に入っていると言いました。

(ii) Target 条件

アンパンマンは、自分のボールが入っているのは1番の箱だって言ったよ。ドキンちゃんは、[e] 2番の箱だって言ったよ。(=ドキンちゃんは、自分のボールが入っているのは2番の箱だって言ったよ。)

(iii) Control 条件

アンパンマンは、自分のボールが入っているのは1番の箱だって言ったよ。ドキンちゃんは[e] 3番の箱だって言ったよ。(=ドキンちゃんは、自分のボールが入っているのは3番の箱だって言ったよ。)

もし子どもたちが項削除の知識を有していて、「緩やかな同一性」解釈を与えることができたとする、(iii)のControl Conditionは容認するが(ii)のTarget Conditionは容認しないことが予測される。一方、もし子どもが項削除の知識を有しておらず、空代名詞の解釈に頼るとする、(iii)の解釈は(iv)の文の解釈と同じになるため、(ii)と(iii)どちらの文も容認しないことが予測される。

(iv) アンパンマンは、自分のボールが入っているのは1番の箱だって言ったよ。ドキンちゃんは**それは**3番の箱だって言ったよ。(=ドキンちゃんはアンパンマンのボールが入っているのは3番の箱だって言ったよ。)

4. 研究成果

(1) 項削除の通言語的分布に関して

ヒンディー語とバスク語において項削除が許されるということが最近の研究(Simpson et al, 2012, Duguine 2008)や本研究の調査によって明らかになり、この事実は「反一致分析」にとって問題となるものである(どちらの言語でも一致現象が現れるため)。一方、そのような事実は、非融合的な格の特徴を持つ言語においてのみ項削除が許されると主張する本研究の提案を強く支持するものである。しかし同時に、カクチケル語においては、ヒンディー語やバスク語と同様の特徴を持つにも関わらず、項削除が許されないということも明らかになった。一見カクチケル語の事実は本研究の提案と相容れないように思われる。しかし、この言語で現れている一致は実は接語であると考え、カクチケル語は融合的な格を持つ言語として分析することができるため、必ずしも本研究にとって問題となるものではなく、むしろ、本研究の妥当性を支持するものであると考えられる。

また、ヒンディー語・バスク語・カクチケル語の他にも、これまで先行研究で報告されている言語も含めて、約20の言語について項削除の可否と格の形態的特徴の通言語的分布を調べた結果(表1を参照)、ほぼすべての言語で本研究の提案の予測が正しいことが明らかになった。(Sato (2011)の研究では、シンガポール英語は非融合的な格を持つにもかかわらず、項削除が許されるということが報告されており、本研究の提案に対する反例となる可能性がある。)

表1: 項削除と格の形態的特徴の通言語的分布

言語	格の形態	項削除
英語	融合的	否
ドイツ語	融合的	否
スウェーデン語	融合的	否
アフリカーンス語	融合的	否
スペイン語	融合的	否
イタリア語	融合的	否
フランス語	融合的	否
ギリシャ語	融合的	否
カクチケル語	融合的	否
日本語	非融合的	可
韓国語	非融合的	可
トルコ語	非融合的	可
モンゴル語	非融合的	可
ヒンディー語	非融合的	可
ベンガル語	非融合的	可
マラヤーラム語	非融合的	可
バスク語	非融合的	可
中国語	非融合的	可
ジャワ語	非融合的	可
シンガポール英語	融合的	可(?)

(2) 項削除の獲得に関して

実験の結果を表2にまとめる。

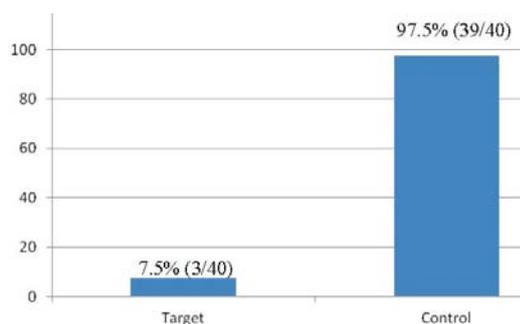


表2: 実験結果 (容認した割合)

全体的に子どもたちは、(iii)のControl条件を容認したのに対して、(ii)のTarget条件は容認しない傾向が観察され、この差は統計的にも有意であった(Paired t -test: $t(19)=13.08$, $p<.0001$)。この結果は、子ど

もたちは(ii)や(iii)の文に「緩やかな同一性」解釈を与えていることを示すものであり、日本語を母語とする5・6歳の子どもたちが項削除の知識をすでに有していることを示唆する。日本語では項削除が許されることを示す直接的な証拠はほぼ皆無であるにもかかわらず、子どもたちがすでにこのような抽象的な知識を有しているということは驚くべきことであり、項削除の可否は直接学ばれるものではなく、格の形態的特徴を通して間接的に学ばれると考える本研究の主張を支持する結果であると考え。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Otaki, Koichi. 2012. Argument Ellipsis arising from non-fusional case morphology. In *Online Proceedings of GLOW in Asia Workshop for Young Scholars 2011*, eds. Koichi Otaki et al., 247-261. (査読有)

② Otaki, Koichi, and Noriaki Yusa. 2012. Quantificational null objects in child Japanese. In *Proceedings of the Fifth Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference (FAJL 5)*, eds. Matthew A. Tucker et al., 217-230. Cambridge, Mass.: MIT Working Papers in Linguistics. (査読有)

[学会発表] (計3件)

① 大滝宏一, 杉崎鉦司, 遊佐典昭, 小泉政利. 2011. 「カクチケル語における項削除の可否について」日本言語学会第143回大会. 2011年11月26日, 大阪大学.

② Otaki, Koichi. 2011. Null arguments in Kacchikel and their theoretical implications. 南山大学第38回コロキウム. 2011年10月22日, 南山大学. [招待講演]

③ Otaki, Koichi. 2011. Argument Ellipsis arising from non-fusional case morphology. GLOW in Asia Workshop for Young Scholars. 2011年9月7日, 三重大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大滝 宏一 (OTAKI KOICHI)
三重大学・共通教育センター・
特任講師 (教育担当)
研究者番号: 50616042

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし